

4 乳頭部癌においてリンパ節転移個数は独立予後因子である

坂田 純・白井 良夫・若井 俊文
横山 直行・坂田 英子・畠山 勝義
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【目的】乳頭部癌におけるリンパ節転移個数の意義を明らかにする。

【方法】D2リンパ節郭清を伴う根治術を施行された乳頭部癌51症例を対象。術中に所属リンパ節転移陽性が疑われた全身状態良好な24例において、大動脈周囲リンパ節郭清を追加。リンパ節転移個数(0, 1-2, ≥ 3)と治療成績とを比較。観察期間中央値は121か月。

【成績】リンパ節転移陰性例は25例、陽性例は26例であり、両群の予後に差を認めた($P = 0.0001$)。転移陽性26例中8例が3年以上生存し、5例が5年以上生存した(5生率28%, 生存期間中央値27か月)。リンパ節転移個数は有意な独立予後因子であった($P < 0.001$)。リンパ節転移個数1-2個の予後は、3個以上の予後と比較して良好であった($P < 0.0001$)。

【結論】乳頭部癌におけるリンパ節転移個数は、予後を強く反映する。D2郭清は個数2個以下のリンパ節転移を良好に制御する。

5 慢性膵炎に対する手術症例の検討

大谷 哲也・斉藤 英樹・山本 睦生
片柳 憲雄・桑原 史郎・山崎 俊幸
松原 洋孝

新潟市民病院外科

慢性膵炎は持続的な炎症性疾患であり、病態に応じて多彩な臨床症状が出現する。今回、当科で経験した慢性膵炎手術例を検討した。

【対象と方法】過去8年6ヶ月間の慢性膵炎手術19例(男15, 女4)を対象とし、原因、症状、手術成績、治療効果及び予後について検討した。

【成績】

1. 原因：アルコール性13例、胃癌術後1例、膵胆管合流異常術後1例、不明4例。

2. 症状：腹痛79%, 黄疸26%, 発熱16%, 嘔吐11%, 体重減少5%, 下血5%。

3. 手術成績：腫瘍形成性膵炎6例及び膵石症2例は、膵切除(PpPD3, DpPHR3, DP2)が施行された。膵管著明拡張例は3例で、膵管空腸側々吻合術が施行された。膵仮性嚢胞4例中3例は嚢胞空腸吻合術が、他の1例はドレナージが施行された。胆管狭窄3例は胆管空腸吻合術が施行された。膵石の乳頭部陥頓を1例に認め、切石と十二指腸乳頭形成術がなされた。脾静脈閉塞を伴う胃静脈瘤を1例に認め、脾摘術及び血行郭清術が施行された。DpPHR1例は術後胆管狭窄のため再手術を要した。側々吻合術2例に合併症を認め1例は術後仮性動脈瘤より出血し、開腹止血術が施行された。他の1例は膵液漏がみられたが自然治癒した。平均入院期間は23日であった。

4. 治療効果及び予後：腹痛は全例、軽快又は消失した。膵切除8例中1例(DpPHR)は、術後1年で膵炎が再燃し、仮性嚢胞を形成した。側々吻合術3例中1例は膵炎が再燃しアルコール再開が原因と考えられた。

【結語】

(1) 腫瘍形成性膵炎では膵切除が有用であるが、慢性膵炎の病態は多岐にわたり、膵管、胆管の変化に応じ適切な術式を選択することが重要である。

(2) 術後の経過観察は必要で、禁酒を含めた生活面の指導が必須であると考えられた。

6 肝細胞癌に対する肝切除において術前血小板減少症は mortality を予測する

金子 和弘・白井 良夫・若井 俊文
坂田 純・横山 直行・畠山 勝義
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野

【目的】肝細胞癌における K_{ICG} による肝切除術式選択の妥当性を評価し、mortalityに影響を与える危険因子を明らかにする。

【方法】根治切除が施行された肝細胞癌198症例を対象とした。20種類の臨床病理学的因子と